

# 科学の国際的展望

## Worldwide Vision of Science

黒田玲子 Reiko KURODA

東京国際女子マラソンが2008年で幕を閉じることになった。30年前には女性が42.195kmを走るなどできないと思われていたことが、今では逆に信じがたい。同じように、女性が研究者に向かないとは誰もが思わなくなっているだろう。しなやかに、生き生きと女性が活躍するようになってきている。

総合科学技術会議議員として作成に携わった第3期科学技術基本計画にも、女性研究者の活躍の促進が記され、女性研究者の採用目標は自然科学系全体として25%（理学系20%、工学系15%、農学系30%、保健系30%）と、初めて数値目標が盛り込まれた。内閣府の男女共同参画推進会議でも、様々な分野での女性の活躍が必要としながらも、研究者を重点職種のひとつにとりあげた。任期付雇用者や競争的資金などの受給においても研究と出産・育児等の両立支援などを促進することが明記され、実際に、少しずつではあるが改善されてきている。

筆者は、キラリティー（左右非対称性）を切り口に、ミクロとマクロの世界のリンクを非生物界・生物界の両方で研究してきている。キラルな超分子形成、固体状態での立体選択的反応、キラリティー創製・転写など、新しい固体キラル化学を展開してきている。また、固体状態のキラリティー測定は市販の装置では不可能なために、装置開発も行っている。その過程で、無機・有機化合物だけではなく、アルツハイマー病の原因たんぱく質等の凝集過程をリアルタイムで測定できる装置にまで展開することができた。生物系では、一個の遺伝子が巻型を決めている巻貝を対象に、その遺伝子の探索と体の左右決定のメカニズムを探るという発生生物学のテーマに、分子・細胞生物学、遺伝学的手法で取り組んでいる。思うように成果が出ず苦戦することも多いが、なんといっても研究は楽しく、やりがいがある。

男女共同参画推進連携会議の有識者議員として意見を述べ、施策策定に関与してきているが、わが身を振り返るとワークライフ・バランスは恥ずかしい

限りである。現在、私事の方の‘しごと’は仕事の方の‘しごと’に押し出されている感がある。これ以上忙しくなることなどありえないはずであったのに、このたび国際組織、ICSUの副会長に選出され、活動の場を世界に大きく広げることになってしまった。ICSU (International Council for Science: 国際科学会議) は1931年設立の非政府、非営利の国際学術機関(事務局はパリ)で、学問分野を代表する30の国際学術団体(化学関係ではIUPAC(国際純正・応用化学連合)、IUCr(国際結晶学連合)など)と、各国・地域を代表する114の国家科学アカデミー(日本学術会議、全米科学アカデミー、英国王立協会など)の双方を束ねる科学者コミュニティの国際的な要となる機関である。ICSUはUNESCOと国際的学術の促進と発展のために密接な協力関係にあるほか、IPCC(気候変動に関する政府間パネル)の学術的背景となっているWCRP(世界気候研究計画)はじめ、多くの国際共同研究計画を展開するなど、その活動は多岐にわたり、世界の科学技術の発展を先導している。その渉外担当副会長は私の能力を超えた重責の職であるが、皆様のアドバイス・ご協力を得て、ともに、世界・日本のために最善を尽くしたいと思っている。実は筆者が大学院博士課程を修了した当時は男女共同参画という概念もなく、日本にいてもまともな研究職につける見込みがなかったがために、ポスドクとして海外に渡った。皮肉にも、今回の就任にはその海外での経験が買われたのかもしれない。

現在、世界は様々な問題に直面している。もはや、ローカルな問題と地球規模の問題は分離することができなくなっている。科学が社会に影響を及ぼすと同時に、社会も科学の発展の行く先を左右するようになってきている。これからの研究者は、男女を問わず、科学が人類、生態系としての地球の持続的発展に役立つよう、しなやかに生き生きと世界を舞台におおいに活躍していただきたい。



黒田玲子 Reiko KURODA

東京大学大学院総合文化研究科教授  
日本学術会議第3部会員  
ICSU副会長